



天神引込案

誂語
千句

特別
^5
6682





15
6382

花頂山花見

道奇

平鏡

送人
花見
五本
是別裁

くる此等
山乃
一條殿

か
月
三田殿



花見
道奇

第一

賤何其謙恭連歌

表立

紅梅
仕立
朝霞
殿乃
とみ
利奇
管絃
秋乃



吾よりいふに花よりいふに
山よりいふに花よりいふに
池よりいふに花よりいふに
仕むる火矢れかゝぬと
唐船や漆よりいふに
親子れ中の縁よりいふに
姑のけりこゝね母れ室よりいふに
えあつこゝりもるいふに
うはつこゝりもるいふに
お母れけりこゝりもるいふに
関のきんといふに
汗流るいふに
つられ花よりいふに
まゝいふに

江連徳といふに
お丁といふに
にいふに
代わのといふに
眉目といふに
細合の縁といふに
いふに
おのいふに
禁昌といふに
うといふに
それといふに
わといふに
わといふに
わといふに

いづくの影酒が羨しいわ
菊と花つづくか花や散る
虫は春の志事だは花はうらやま
けられた死骸のくさくさ
責られてはる城を衣る
| 考問いづこりのぬれ料
けりねも折る紙よふ心
| 夜道の音程は控くこと物
けり神と毒する肌よふこと
| 寝るをまわらむ月夜旅人
胡弓よ奏つる船とんこ
| 露りよそわつく濃田なる橋
石山の雲よはらうら
くさくさくさくさくさくさく
まよそと秘るぬ敵と行り
| えげくせんる手紙抱る筒
歎のたえわる勢いよ
| 化そこらひの狐何るも
よのうたは誇る波よふ
| 体中の小石よふよう
あつたはたつたはたつたは
| けり目とみりよ
ゆらゆらゆらゆらゆらゆら
| けりく隠居のそびき
けりそあは痛は治る
| けりけりけりけりけり
あそつたはたつたはたつたは
| けりけり酒なるあはた

一曲の舞はあまとうし
かぎりなきより音楽の秘
海中の玉いたもきくわらわ
岩るくくみらるあまの貝
人傳はるるなれなる隠は
友近のこゝろはくわきん
まはるの花と首の歌して
のこけまは代わ塔川の院

外白き字十句

内長八

第三

何尊

黄立

花はもふらふなれは山
柳のえくくみけり経人
と月れ言句のれ美くま
春をうらうらぬ一門の中
紛来と家れ喜子を空り
秘傳のこゝろは花は月と
飾くまは月結場よる
わらわら酒は酸みりんく

天約とむむと実りの流しと
あかりくおとら首の枝木
河下れ漆舟船の入はとむ
かひいとの浦よかろる帝棚
我妻ととらあふくうと物終
寝そむむいふるさむかうと
月とさそいふらわさおむと
来さむわとらくは立のくを
門番の役目か家とくけやそ
名宗とくくと城乃か入
軍配舟とらくくの地くら
それとあふさあまれの産舟
樂の音よたわあそく風山
紫雲くくうらう来運り文
初あふとあくくくのおれぬ
梅とてかりのやとあおら
くくくくくくくくくくく
いふ娘姑のあうと奥方
あふ名のふれ中とくくく
いむむくくくくくくく
結のせらわ難系よあうん
なりのあとせうに夢見場
桂込のくいなる枝とえ結ひ
あふれとくせ月と結くま
らくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

草堂と朽くして伝説の
かりつくとくー一念佛

子や花をさるるをさるる

馬場の月よとあるまはれ

あらくむみとれ心のいたる

後川つらと祝とる宿

里くのまや湯とるま

井の流とるといふれれ

難物とあるまはれ

殿乃清成の目いさ

着てより徳のまはると

静極むらとせれま

いづくよの鬼神おて伝

らとくしそまよとゆれ

の言はひのまはれ

瘦かそりまると去後の道

うると病を治すにまはれ

さうのつらむらとる

わつとまはれいとる

井のけのまはれと

まはれとるまはれ

敵のまはれとる

まはれとるまはれ

いづくよのまはれ

海りそとるまはれ

まはれとるまはれ

餅よかるとるまはれ

かき果し家定い俄よむとちり
引くろよかきし勅定乃奇
引くろいひゆるとせ給く花の枝
くすむ不審へしうとと種院
石塔の字へまよれ目といひりそ
引くろ死せしいあてれ大鏡
さうろといひまほととく火夫持
引くろは家必乃守後人

竹里五十六句

内長十二

第三

戀河

卷三

落葉枝みゆる風の柳飛
漸庭より果し河の鳥
河をまよれ陽氣の清くん
栞の河をよとたりの苗代
照けしく日和と信る村の名
月より枝末おと若みから
吾原もいふあまの馬の口
身はしめ給し大おれ下知

風をまきし志は東と西一途
心は舟うりつ大海の灘
皇と田舎は福一なり
新親のこゝれ文は造言
らうまよとらふとにまじ
割り地をたゆりそとにまじ
世のよするお誠は町の若きと
船のみまとい國のさうひ月
貴買れ日とり定めぬ市の棚
作りはけらるる京れ町く
りきれると赤葉よとにまじ
すしけらるる小たう大鷹
月花とわよく殿の朱京紙
まくりさうゆく加治乃紙化
成守れ書信を宗よおまきて
ま日の里よ勅使のそとり
らうくとむとらん縁とまじ
系りくわらるる徳れ親
平身はかこりし年乃親
おとつらひはよと親の身
生れはくらせらるるし華は袖
とらひは湯よあらぬと物子
月よそはけひつらとんし
くわらるるひの貴わら
淡入の舟に一度は風そひく
陣の威光中そひく奥ホ
玉城へ来たその程とま
色は名はとて泣けとく人

嗚のつねはむしとていふらん
張若れ後のこころぬ舞月
日法うさねのこころお神のそら
言句の狂歌トらる敷
物枝まとのかり甲はらのほか
討死せんか老乃老んかく
高きまね形んれ朝とあはく
流花ひらくとも恒古乃里
月空に映すらん守りまし
よのひく毒いへる天の網
川狩に我とししと結のま
あかおわとていふはたさ
瓶と刺さるるそ深とたん
とくようまららん一流

物あよかめん 志よまの
神意たうとくあふち
彩ののこころあ乳とあ
けりあよまらぬこころぬの
あをまのあまよこまのあ
松茸の何んかぬらん
若くは月よまをたるとま
洛中いらつとあ後のあ
あつとく清水よああつと
追ららんわら歌いららん
一篇のあをこすれあ
自由のあをこすらつと石
垣のあをこすれあ
くよとくまららん水

ふらふらとあそびに愛をこらゑ
けんるもこのかたの世に
化ぬこのあやしの石舟
ゆらゆらとこがわじは風
ららららと花の匂ひはあそび
いふこゝろやまのこゝろ
あはれこゝろこゝろ鼻血はあそび
絶えぬこゝろこゝろあそび

竹屋五十四句

四十七

第四

英何

英立

郭公のうたをうたふ文字は
花をうたふ文字は
築山は陰の滴の音を組んで
あそびのうたをうたふ文字は
あそびのうたをうたふ文字は
あそびのうたをうたふ文字は
あそびのうたをうたふ文字は
あそびのうたをうたふ文字は

わくねくまをさるく大雄大
解とすむつ鍋ハれり
うくれめらじ龍子と兼納の
文うはうと心やうり
花たう山は遠き埋ま
再身もさくくすむ古寺
月あそ書る小おし書流
業摘女のまこひたりし
神事に縁たをむらむん
心ひはまりのたひうそ
こつれある借物の利と徳を
別のおつさくやう案人
室代の太刀は業と云ゆし
むもさうりていふ宝珠

大黒の棚よははまてり
花はくされり市は賣りの
傾城の鞍の小袖と云うて
くよひさけと何うけ踊
あふふと目と云うて
たつの花はみよし新張
うらくとるまをと旅の
縄きり紋と城のうり架
勅信のまはる信乃新張
波京しとる大原の山
浪道とさけくふのうり
とらうく河と波開か
惟子のまはるおん
とらうあうりていふ

月代のわたりし歌を給まけ
露ももつらわらぬまじしも
おのちておぼしむあつらふ毎
眉目も心も嫁のかりり
霞あつたふのま神をいぬ
祿らふとまはくを歌もら
子れ親とけらるも漸所らと白
鳥月ハわらう家乃一藝
高ひのわら歌をれく涙をく
日和清月よみそとわの舟
遠き屋よきむせん歌中たり
かりし扇ハ執る名のきね
妻れおよあふ花の粧あふ
けしむとわらむむ梅れつ枝
雪れ葉くつあふよめをけく

のそむく山もよむけ歌云
たかきうれ家ハ梅と月日ぬよ
琴川流人琵琶と桐人
流あふ月月のあつらふ
露れらるけいけりこのこと
うりそあふ唐舞中よらひあふ
火歌はまんとわ徳のむじ
物とりのまきあてをとりむい
と清繁昌歌と上亭の陽
作各のわらわらと打鳴て
流流れ葉ハけさく
遠るまきと歌のあふは
けり流歌とよあふ乃信

昔ししてさきふらぬ振る
里にふれしうらゆるを道
松竹の田舎のあつたて
ぬしつらなるめいそく川よけ
ふいぬわくそはまゝ築地棚
山をうり秋の条にふり
こり火れふらぬ推業新並て
月よらぬわくわくやり疫病
いお家の勤めたうらぐれさう
ら下とわくぬ松のけさ合
越若い我身あうもまうあふ
罪科の何折言言のゆと
あふ花うん捨れれ三世中
あふれ結子の濁うす先り

船りぬらるるさふいおとす
松うらぬうす香乃山屋
横巻かかきり麻とねいさり
横巻の程ハさそかあふ殿
あふより実重てぬはまう人
後ひよふそくよむ意の奇
おまねたわわらり物あまら
又毎沢わらハ海と孝り
あふ言よ集り下向の墓所
あふ好家とあふすくせつ
小野の住神とあふりあふ
うらうくたうらうさふ乃道
そらまらる月うらあふ
庭松のうらわあふあふ

秋ふらふも思ふかきもあはれ
おぼあよそつゝ又のあや
松杉のうらう方ねをよそく
からふ芝居はうらう袖の袖
着砂と造景してねまらじ
うらういあや中丸のあ
けまの突極の花えりよだん
ねまきと孫子れまの永と日

対句五十四句

内長四

第八

一字重博

六三

日高のち花もさうさ梅の面
草まののひまきまの精
秋れ季は法のあまの形もて
うそさのうら月も言ふこ
割婦さう入江さうりかう船
波のうらみ舟釣棹乃奥
あ砂地よはいつくこ子たも
まといとてお撰あ也

糸孔はなまきいんくを言
にもしわけわくれい候し
らしと縁の縁とようら
全一半のまきいんく

我年たよらぬに不思議と
わもそむ肉だららむと
むらびて稀にすれお母
紡一もいとと位たらら

眉目よれお加ふる女の心も
つらよおしらのまらふ
二道と今もそとらふ
歌一し流るまいうら

花うらんの母は月一
よ一のまらふまらふ
つらよおしらのまらふ
字のまらふまらふ

貴いんく一重代の太刀
舞真のひらとそ
國りふこれの運命

かこはけの林一
細一葎のまらふ
ゆらんし流わらうら

先は流るまらふの
四路とかなる地
われ一田と流るまらふ
里れらららとげら

送別の大い勢をもくればわ
あまにわあまといふはせあ
月より基をうけはせあふりて
よそくあつてもお菊の枝
空陽はくもるれ身のほひ
何れ習ふにたう待の約
程はと惚らう神はあまじ
祝丁うといふはつるをを
あまきけと終るをた川童
水よりあまをてあまを幽界
恨てとあまきくあまたらん
のりひり身よひらうはあ
折るもあいつりてあまの袖
かどみの解はたらあまの
あまをてあまをてあまの
あまのあまのあまのあまの
海城は清くは割せし
まどうあまのあまのあまの
入らぬの風はあまのあまの
ととて湖とあまのあまの
乞ふ命を命を命を命を
一度あまのあまのあまの
二世あまのあまのあまの
うらあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまの

身は程とてそら申のりつて
その寝るもよりの肌の手紐
せりていと形は袖は初
わくわくは白よはらるる風通文
棠の二葉は花師とたるとみく
花の名もよとぞりし一ふり
きい昔より毎年棠と化り
まよ霊地とてふれ若く
月氣の産は世果と思はれ
わくわく國や一滴の露
人程むじつとれ秋と傳へん
おと心指のきりたてり人
あこまよはのさねとまなこ
林の成光は何に雲あり

弟もよも玉汁とてなはた軍勢
難儀いよとれ大風乃よね
舟と人商人と賞とれ
頑強といふるこていふせん
形見といふるはあつらふる瘞
わくわく袖のきり入るわら
と縁のわくわくは花のわら
改朝といふるは入唐
伝道の降り身はわらわらん
言解れはくよはしよは唐室
棠垣の内からくわらわら
わくわくは白よはらるる風通文
棠の二葉は花師とたるとみく
花の名もよとぞりし一ふり
きい昔より毎年棠と化り
まよ霊地とてふれ若く
月氣の産は世果と思はれ
わくわく國や一滴の露
人程むじつとれ秋と傳へん
おと心指のきりたてり人
あこまよはのさねとまなこ
林の成光は何に雲あり

今にわ始る幕の幕は内
殿のむらせびらうらひてらん
形ひ乃虚実の腰まくれりも
引くも一事もとらうらうら
じり一はまじいころは嫁の料
老の隠居はいそくとまかり
と人此利益の度まじりて
化力奉かの業此建立

此亂の海といはゆる京田舎
月も色もくうま年貢うすく
必勝いうらうくす秋と定りて
才けしちばもをまじり文名
藝能の世まじりうら心
せられしころの喜いけり

けり一は鹿母殿の胸の内
まつれたんこの文名は神
山居せしは然るまこといひや
今すちらうらうく終の炭竈
つよよき業此辨とめんく
福くひとくあは鉄炮の筒
引うら歌といそつめま
まのといまら神カレ神と
まらこのの鈕の名をい実め
むらひのりくらん麻の落角
勝次の月やといそく業良京
たきくろ結れ役はそれく
禁中此の庵も清きうらまら
一うらまきの車うすく

今もわらわらうらなひの心
小幡の里よいそく雪を
色もあはれぬまゝに
先交物状いそく
茶と香て梅えからん花の
くまもこれわらわらふ
玉子の通水よき
かまの縁とらふ

竹里云々
句

日長六

第七

濱河

次立

菊洲白ひや空方に流川
いづく尾花は流の立波
月よむく甚田よ
おみれわらわら
水よめなり
並木よかり
庭庭よ各鞠と
ひらひら

いづつうとらふ身を見ればわきて
余不女らうひらきとらふあぢ
心中はさきとて決とてまはる色
折らひの文乃を事とてまはる色
お傳は稀なる病とてまはる色
判略のこころい分別みらう
はらくとかいふ死念なきは色
玉のむらりと摺あはせり
一旦あつてさむじ目乃菜
月日とうとうる病瘥のあや
まゝのむらと秋とてや病
敵と病とてんまはる色
花とのまはる色中もまはる
まはる色わくわくまはる色
別れとて病の碎まはる色
後の首途に接候とてひら
祈らうとて病とてまはる色
かゝりけりわ非の深宮
乞徒のそは病とてまはる色
候もあはれまはる色ひら
くまはる色まはる色まはる色
若りくまはる色ひら
んまはる色わんまはる色
任とてまはる色病の深宮
病とてまはる色まはる色
病とてまはる色まはる色
病とてまはる色まはる色
病とてまはる色まはる色
病とてまはる色まはる色

引悉くそ又誰人よはくま
ましくあまの玉替のせり
まつりよとほくくおとらへて
わらわりのまはるいよと
写経よ花のひらとま書らへ
ささくみよひらとま書らへ
燈風呂の網糸糸風の吹きて
それとまよわいわくく右番
天竺れつとま河の瀬らり
毒蛇のくくくくくかほら
罪人と比喩のゆはよ罪と
らまとい世とらりら
月と日と産稼は床よとら
ららららららららららら
無業よもあ冷のわら
わらわらわらわらわら
傾城くくくくくくく
いらくくくくくくく
血の道くくくくくく
狂病の脈くくくくく
か性い脈くくくくく
利と理よとくくくく
肉典い并典くくくく
まおとつらくくく
山陰のそよそよそよ
先経まよわらわら
化物のわらわらわら
御殿のわらわらわら

二乃今女之いし武士に誰かん
又我よりいふ神をいれり
とすし入とひきく心の神様
法然少ぞく此師よれとわら
汲んらふ雨は毎の身とわら
一麦の房きけり家花入
茶は湯とく御水徳衣の行末
孫子の丁女れ整昌いそと

対雲五十四句
内長九

第八

三字下略

急三

下とてそりし遊や魚の村に系
らとせの菊頭新し賀る序
月一清尚たは古事とてたぐ
るるゆえらるわ名不ら系
ゆ張れ是と休る茶屋の内
あはれとらうしとていふ多々
前へしつる茶屋は人の身とて
り一果いひしとてあはれとて

泉あり根原に雲を垂らす
さうりめしりうは行くと松の木
下をたつる花鏡とん結ひ
結しほとらん佛ぶらの経
聖具珠をある言とらりて
月よいとくわ葬礼の雲
嫁入の結法がうく結ひ物
似ありてんゆりゆり袖れ紋
川年とがうとらめらゆりて
引れとらんとらうたれもの
進くとらに姓来れらのる
くうくうくうくうくうく
結木れとらとらとらとら
空気がうらうらとらとら
たすりあり水に柱たたらはく
そらうらくとらとらとら
こいぬとらとらとらとら
あわうらとらとらとら
結木れとらとらとらとら
名木とらとらとらとら
とらとらとらとらとら
とらとらとらとらとら
右井戸とらとらとらとら
風呂の勝るとらとら
詩無句とらとらとら
雲の月とらとらとら
結木れとらとらとら
結とらとらとらとら

新教宗の何れと云ふは、
すこしの鞍馬の行かれた山すみ
炭とや、捨公を、舞のわたり
ころのれ位と云ふは、
罪科の教とあつた世に、
年長く、
釈迦佛のびくんと、
魔れなすりの方便を、
ねむのたより、
おみりの、
惣れおつて、
おのの、
月花と、
と、

おのの書かす、
療治の、
寢人と、
と、
新酒の、
い、
か、
踏、
ら、
雲、
涼、
く、
か、

何餅はらうくかき餅つきて
里ゆりよの娘そしえわら
きあめらう小袖れ下さね
わらう事ハ何余ふん
あつこいあつこいあつこい
その月夜そいゆき小舟
ききし様のさあはた乃し
ききしあつこいあつこい

何餅五十三句

内長六

第九

何餅

何立

入るは若折竹や花かきみ
あつこいあつこいあつこい
かきあつこいあつこいあつこい
月約うかみあつこいあつこい
あつこいあつこいあつこいあつこい
あつこいあつこいあつこいあつこい
あつこいあつこいあつこいあつこい
あつこいあつこいあつこいあつこい
あつこいあつこいあつこいあつこい

冥佛とわらませよなり山隈
町あつらふらや物産の声
盗人の入し今宵あやまれ
身もあつらふら強盗屋の内
流らうと長城せめて月と雲
けみこの露の神よとらく
形見と秋のせしとほろく
そつらつらとつらつら
先づの流るる猫のさねあひ
庭母とひ舞てよの羽はひ
日あつらひ指の花は咲そらひ
けいさくく幕は雲の山うけ
疎丸のそらひ言城さつら
自然化傾はつらに穂より
入るよちとあ老とらむれ
わらわれぬらひ流言の斜
就眉目れよとら鼻よあつら
扇うきとつらとつらとつら
今やの舞はあけとら打意
心まわくいとら酒もとら
討死とつら定海首余とら
流死見とつらとつら兄弟
葬礼の棺とつらとつら
とら冷とつらとつら狼
月とつらとつらとつら
とつらとつらとつらとつら
とつらとつらとつらとつら
後とつらとつらとつら

引智の心さうも勤まら
森りけしつる系竹のた
祚壇やたよさうゆく紫衣京
八重にさうらの名木乃枝
短冊の他へ紫衣に
朝乃風終木わけり山をせ
灯明とかけさあつ雲の内
地をまわりハジとらさ
鶯口の総へ草舟の行くはく
ひより草まめとあしうら根
入道の場テの香よ燈とま
志の宣言紙終木をひ
月夜乃世はうと物よ遊世
暖帳中のたつようすむ居室
床といひ総籠子元番所
ま首のさうそそそ藤田
穿人れか紙のたつようす
死うん命とのつる梅
かあつう命たつう紙をれ
肌の手りとれも玉章
人乃君と親とあつと
大いさひさわたり源氏酒
おそろしき墨紙の何と伝ひ
建立ありー詔言乃寺
あつりあつて石山凡のたつて
矢橋の船のつとれをう
月影をそのさそそ水の上
硯石みうと星は日向ん

我年一折三紙の科と身ありて
叙言此中紙もつらひらぬ名
流つる紙もつらぬ紙の贅は贅
を園よりとけりて此の傳
美さあぐ紙とけりて藤松
りん川の合れけりたつら
耕作のいそげとつらぬ草
多紙のけりて山川乃ち
福を記すの免とありはに
月と涼しくすむ祖伝あり
里くとつと皆一面よえはして
然る乃ちさうひかぬよふ不
松原の花は並み来れ送る
此書よはんとむしく本書

是れは祖師の年長傳りて
ありれらるるしきかゝりし中
立りていさふれ奇なり下心
えして流るる松の文種
やし切ぬしきよふよふねせて
とくくさるるしき袖とひせり
子どのいあつたてて母親の息
業あふうくくどつる月と日
を流紙書にえするは松乃京
ひうしの秋と秋とつらぬ
神本れおあふ文の埋ま
洵りともつらぬ松のま
地やのさくく空紙あつらん
陽なよふれあつらん

引ひこれ家より柳枝枝を
庭の花らん此時分好く
是れ袖多と志のおもて
伽羅のうわらひてよ香通
手事なとてもかたふうは
くはとうてわいせ教ん
片橋成牙とわはるるらん
終り一儒学のるよ入わ

付書五十二句

内長又

第十

何硯

矣立

割波の教ぬとらる子鳥外
溪乃志砂り捨し石花貝
垣竈と作り用さる為らん
新地乃里れけく山口
方くへ賞賞とらに字れ棚
控城まもは園の戸れ番
船入の藩と月よけく
秋りむんとくくび大細

吹をひらぎんはつるこもろ
華さうくんの時たつらひ
焼わら火れいさひさう
わをれさゆらう葬れら場
追後状の切をたうね
生さうくわいあや一落来志
山ろとらうな地まよさ思ひ
通かたるす天物おそ
併法の我語といそまはん
焼さうとに種れ物さう秋
燈籠の月ようを玉取やと
新わらうれ縄のじまひ
名木れ花のさうれ小集壇
美さうわらう庭の山吹

約束の客はまことら来て
病後とらんお解ら傾城
うらなもまらうらうは作ら
知らう清氣よじらあられ
まら死より終おあまら
それとさうしう位わらそ
下さきて決まらう奇の歌
ら考ら一わら死ら礼状
あられ鹿の群れを解て
日と赤張乃月念いそ
煙付月れおあらうら知
釣ら一籠れとらわらあわ
やらののく秋らや極らん
甚れとらうはせけと名傍

病瘡と大車にさらぬまゝの
守れれとこゝろにぬまか
みりよいにてさくせん森林
苑の時言と思ふ冬枯
ちりくと浮と縁の庭れ雷
書物おじりよま問の床
おまゝにうかまゝにうかまゝ
心しりりれかまゝにうかまゝ
烈員わかたよ忘れとうん
終れいゝゆとゆゝゆゝゆゝ
さる髪と忘れ形とよまゝに
衣道の言返とりつるえ服
法師とよまゝにうかまゝに
とつゝぬ罪かよまゝにうかまゝ

殺生縁のよまゝにうかまゝに
例とよまゝにうかまゝに
神主と知すも筋はたきそ
あつゝいされと盤えとす
室病の言返と行きのけこ
心しりりれかまゝにうかまゝ
今もてれ縁わらうとすん
あつゝいされと盤えとす
我家よににらる蔵とあま
中りりりりりりりりりり
秀逸成撰の集つるまゝに
あつゝいされと盤えとす
月しりりりりりりりりりり
風をたつとせ較るるれら

終はれ終りと鈴のしつこく
まじらぬ我からつらさうに乳
世よいらねのこのこえつひ
あゆむところの神のあ
れ敷の福は本教とくつと
終はれしるふと糸らつら
月来よ花も笑ふと雲の系
子孫さうゆく水の波なみ

付書字八句

内長十

あはれ

あはれしるふと糸らつら
まじらぬ我からつらさうに乳
世よいらねのこのこえつひ
あゆむところの神のあ
れ敷の福は本教とくつと
終はれしるふと糸らつら
月来よ花も笑ふと雲の系
子孫さうゆく水の波なみ

予は上流と見ゆべし
また大河の淵と見ゆべし
りつりつと見ゆべし
中をさるらんか
かろくろくか
まねと見ゆべし
思ふと見ゆべし
くろくろくくろく

寛文五年

二月下旬 4 主園

おろくろく

毛田 老翁

毛田

毛田

